

主体的・対話的で深い学びを実現する授業構想【国語／言語文化】

1. 対象 1年生

古文では、用言の活用や助動詞などの文語のきまりを理解しつつある一方で、内容の解釈を苦手とする生徒が多い。一つの作品だけでなく、他の作品など関係を踏まえ、内容の解釈を深めていきたい。

2. 単元名 「他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深める」（全6時間）

3. 単元で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。 (知識・技能) (2)イ 古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや古典特有の表現などについて理解している。 (知識・技能) (2)ウ
思考力, 判断力, 表現力等	読むことにおいて、作品や文章の成立した背景や他の作品となどとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。(思考力・判断力・表現力等) 「B 読むこと」エ
学びに向かう力, 人間性等	今までの学習を生かして内容の解釈を深めるとともに、粘り強い取り組みをする中で我が国の言語文化への理解を深めようとしている。

4. 本時の目標

※「5」を単元で作成する場合は省略可能です。

5. 授業展開【(本時)・単元】 ※本時または単元いずれかに○を付けてください。

解決したい課題や問い
紀貫之はなぜ女性のふりをして土佐日記を書いたのか？

考えるための材料A	考えるための材料B	考えるための材料C
『土佐日記』の「門出」と「帰京」（教科書本文）	『小右記』（藤原実資） 「寛仁二年十月十六日～」	言語活動「土佐日記」を漢文に書き直してみよう
想定される活動A	想定される活動B	想定される活動C
本文の内容を深める。作者本人の同行の女性という設定で書かれていることを知る。「疾く破てむ」から読む人を意識して書かれたことを感じる。	『小右記』を読み、当時の日記が漢文で書かれた公式の記録であることを知り、『土佐日記』と比較して、日々の記録の要素が強いことを知る。	土佐日記の中から1文を選んで漢文になおす。言葉の選び方などの難しさを感じる。

対話と思考（対話を通じた協働的な問題解決のプロセス）
個人とペアでの活動で授業をすすめる。 考える材料A ●「男もすなる～」ってことは、紀貫之が女性のふりをして書いているんだね。なんでそんなことしているんだろう。」●「なんでだろうね、でも、それぞれの日に何があったかわかりやすいね」●「他の人が書いているという設定で、出来事を客観視できているのかな」●「最後に「破り捨ててむ」ってことは破り捨てたいって本当に思っていたのかな」「でもそれが残って今あるんだよね。」●「でもこれって、読まれることを前提にしているよね。」 考える材料B

●「これは、中学生の時にやった藤原道長の場面だね」●「さっき当時の男性の正式な文章は漢文で書かれるって先生が言っていたね。」●「きちんと日付が入っていて、その日に何があったかわかるね。」●「そうだね、感想は入っていない日々の記録だ。」●「そうすると、仮名の方が、日々の思いとかは書きやすいね。」

考える材料C

●「「男もすなる～」は難しいから、短めのところにしよう」「これ漢字や動詞はこれでいいのかな」「難しいね、昔の人もこんな風に考えながら書いていたのかな」

学習の成果（予想される生徒のあらわれ）

●紀貫之が女性のふりをして仮名でこの日記を書いたのは、仮名の方がこの時の貫之の気持ちを書き表すのに適当なものだったから。男性が日々の記録として書く漢文の日記では書ききれないから。

●当時、日記は男性が書く日々の記録としてのものだったが、仮名表記の新しい表現形式の文学を作ろうと思い、女性のふりをして書くという形式が取られた。また、第三者の目線から客観的に書くことができるから。